1 月第 1 週の礼拝説教

■日　時：2024 年 1 月 7 日（日）10：30～11：30　降誕節第 2 主日礼拝
■説　教：　保科けい子牧師
■説教題：「　神の賜物　」
■聖　書　新約：エフェソの信徒への手紙 2 章 1～10 節（新約 p353～354）
■讃美歌：278「　暗き闇に　星光り、　」
　　463「　わが行くみち　いついかに　」

2024 年になりました。1 月 1 日月曜日の午後 4 時 10 分ごろ、能登半島地震が起きました。テレビの報道画面を見ていたら、1890 年 12 月末に記録的な豪雪の中を引っ越して 10 年近く過ごした富山県高岡市の名前をテロップの中に見つけました。石川県の能登半島の右側の内能登といわれる側を下ってくると、富山県の氷見市がありその隣が高岡市です。その当時、私の東神大での同級生が輪島教会の牧師だったこともあり、今回の地震の中心地である輪島市にも何度か出かけたことがあります。がれきの山になってしまっている朝市の開かれていた商店街の映像を見ては、信じられない思いがしています。1995 年 1 月 17 日の早朝に起こった阪神淡路大震災の時は東京に移っていましたが、かつて住んでいた西宮市が被災した様子や、時々出かけていた神戸の街が壊滅的になってしまった状況を映像で見ました。また、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の時は、住んでいた仙台市はまさに被災地になりました。私はその日、母校の東京神学大学の卒業式で祝辞を述べるお役になり上京しておりましたので、大学の礼拝堂の壇上で地震に遭いました。様々な交通網が寸断され混乱を極める中で、一緒に上京していた夫と共に、東京から日本海側に出て、タクシーやバスなどを乗り継ぎ 3 日後にやっと仙台に戻ることができました。いろいろな場面が思い浮かんできて、被災された方々の苦しみはいかばかりかと思わされています。そのような中で、日本基督教団の中部教区のホームページを見ましたら、1975 年から 2 年間、私どもの立川教会に神学生として在籍していた釜土達男牧師(立川教会第 2 代目の牧師であられた江口ハナ先生の甥にあたられる方です)のおられる七尾教会も、かなりの被害に見舞われたことが分かりました。被災地では今もなお、数多くの安否不明の方々がおられ、厳しい寒さの中で多くの方々が苦しんでおられることを覚え、祈り続けたいと思います。

さて、教会暦によりますと、昨日 1 月 6 日が「公現日」と呼ばれる祝日になっています。実は、キリストの生誕日は聖書にもはっきり書かれておらず、正確な日付はわかっていません。そのため、イエス・キリストの誕生日としてクリスマスと決めるまでには、初期のキリスト教では様々な混乱があったと言われています。公現日に関しても、ギリ

シャ語で「エピファン」と呼ばれる実体化した神を祝う1月6日がキリスト教化されるなかで、公現祭の祝日となったと考えられているようです。また、「東方の博士たちがキリストを訪れた」のがイエス・キリストの誕生日から 12 日後であったという言い伝えから公現日が祝われているとも言われています。生まれたばかりのイエス・キリストが初めて出会った人が東から訪ねて来た異邦人であったので、ユダヤ人だけではなく神を信じるすべての人々にあまねく神の教えが伝えられるという大切な意味を持っているとも考えられています。しかし、私自身が過ごしてきたいくつかの教会は、公現日を特別には取り上げておりませんでした。ですから、本日「公現後第 1 主日」の聖書箇所も、主イエスの誕生や洗礼を記している福音書ではなく、エフェソの信徒への手紙2章1節から10節までを選びました。

ところで、本日の箇所では見出ししにも「死から命へ」とあるように、人間の二つのありさまを語っています。一つは、1節2節にあるように「**自分の過ちと罪のために死んでいた**」者であり、「**この世を支配する者に従い、過ちと罪を犯して歩んでいた**」者であって、キリストを知らずに生きていたありさまです。もう一つは、キリストを知りその救いに与った者の生きかたです。しかし、聖書が私たちに語っているのは、この世の倫理や道徳に従って生きていればよいということではありません。一番大切なことは、人間は神によって創造された存在であり、しかも「神のかたちに」造られた特別な存在であるということをしっかり認識することです。「神のかたち」に造られた人間は、本来、神を思い、神を礼拝し、神との交わりの内に生き、神の意志を喜び、神の意思に従って生きる者として創造されている、ということです。本日は読みませんでしたが、そのことが1章の 3 節から 14 節まで言葉を尽くして語られています。それを一言でまとめるならば、「神の恵みはキリストにおいて満ちあふれる」ということになるのでしょう。そのことをさらに丁寧に語っているのが、2章の4節から6節です。「**4 しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、5 罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、――あなたがたの救われたのは恵みによるのです――6 キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました。**」これは、キリストを告白し洗礼を受けた者が信仰の目で現実に確認し受け取ることのできる恵みです。この素晴らしい命への転換、救いは、8節において、「**恵みにより、信仰によって救われました。**」と記されています。そして、重ねて念を押すようにして「**自らの力によるのではなく、神の賜物です。**」と語っています。私は、この箇所の「**恵みにより、信仰によって**」という言葉を読むときにいつでも、恵みはもちろん1章から引き続いて語られている「**神の恵み**」であると受け止めるのですが、それに続く「**信仰によって**」を私たち人間の側からの信仰というだけではなく、神様の真実、さらには主イエス・キリストの真実をも重ねて読んでいます。そうしますと、今、私たちに働いているのは主イエス・キリストの力であり、キリストが共にいて私た

ちに命を与え、生かしてくださっているということが確かに感じられるように思います。そのことこそが本当の「**神の賜物**」なのではないでしょうか。そこから、9節の「**行いによるのではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです。**」という御言葉に素直に聞き従っていけるのです。私たちは神様を信じている、私たちは信仰者であると自認するとき、もしかしたら、そこには私たちの行いの確かさを誇る思いがあるのではないか、ということを問われているような気がします。

最後に、10節にまいりましょう。「**わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです。**」と語られています。冒頭の「**わたしたちは神に造られたものであり**」という言葉は、以前に礼拝で用いていた口語訳聖書では「**わたしたちは神の作品であって**」と訳されていました。私は今でも、その言葉が心に刻まれています。2018年に出版された最新の訳である聖書協会共同訳聖書では、「**私たちは神の作品であって**」と口語訳に戻っています。善い業を行って歩む者となるために、キリスト・イエスにおいて慈しみのうちに新たに造られた神の作品、それが私たちであると考えることができるなら、私たちは、神様が前もって準備してくださった善い業を行って生きることができるはずです。今年は、そのように神様が私たちを造ってくださったことをいつも覚えながら、主イエス・キリストの十字架を仰いで歩んでまいりましょう。